

復活祭のための個人や少人数での祈りのしおり

*個人で祈るときは会衆の部分も自分で唱えるが、キリエは会衆の部分は唱えない。

*主の祈りは新式文から抜粋・引用。

1. み名による祝福

司) 父と子と聖霊のみ名によって

会) アーメン。

司) ハレルヤ、キリストは復活されました！

会) キリストは確かに復活されました、ハレルヤ！

2. その日の詩篇

詩編 118:1-2&14-24

3. キリエ

司) 主よ、憐れんでください。

会) 主よ、憐れんでください。

司) キリストよ、憐れんでください。

会) キリストよ、憐れんでください。

司) 主よ、憐れんでください。

会) 主よ、憐れんでください。

4. その日の祈り

全) 神様。あなたは私たちの贖いのために御独り子を十字架の死に渡し、栄光の復活によって死の力から私たちを解放してくださいました。私たちが日ごとに罪に死に、復活の喜びのうちに御子と共に永遠に生きることができるようになってください。あなたと聖霊とともにただ独りの神、永遠の支配者、御子、主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

5. 聖書の朗読

(すべてを用いてもよいし、一部を用いてもよい)

使徒言行録 10:34-43

コロサイの信徒への手紙 3:1-4

ヨハネによる福音書 20:1-18

6. 小説教

(少人数での礼拝の場合は一人が代読、個人での祈りの場合は黙読してもよい。その後、沈黙や少人数での分かち合いを持つこともできる)

7. 主の祈り

(主の祈りを祈る前に、自分の言葉で祈ってもよい)

全) 天におられるわたしたちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。
みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。
わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。
わたしたちの罪をおゆるしくください。わたしたちも人をゆるします。
わたしたちを誘惑に陥らせず、悪からお救いください。
国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。
アーメン

(ローマ・カトリック教会／日本聖公会 共通口語訳、2000年)

8. 祝福と閉会

司) ハレルヤ、キリストは復活されました！

会) キリストは確かに復活されました、ハレルヤ！

司) 全能の神、父と子と聖霊の祝福が、私(たち)と、離れたところにいる仲間たちと、すべての人の上にありますように。

会) アーメン。

小説教：

イースター、おめでとうございます。「日曜日は、小さいイースターだ」という言い回しを聞いたことがありますか。毎週の主日は、主の復活を祝うイースターの縮小版であるということでしょうか。私にとってこの表現は、長く納得のできるものでした。しかし、ある礼拝学者が次のように言うのを聞いて、考えをあらためさせられました。「毎週の日曜日は、決して小さいイースターではない。なぜなら、教会暦の成立を考えれば、主日としての日曜日の方が先であり、イースターはあとで加えられたものだからである。だから、日曜日が小さなイースターではなく、むしろ、イースターが大きな日曜日なのだ。」

毎日曜日、毎主日を小さなイースターと言うとき、そこで意識的・無意識的に拘らず意図されるのは、毎週の礼拝は何か不完全なものであるということです。しかし、この礼拝学者はそうではないと言います。毎週の主日礼拝はそのまま充分であり、そこには欠けたものはないのです。そのような日曜日の、さらに大きなものがイースターであると言うとき、主の復活をおぼえる喜び、新しい命への希望もまたさらに増し加えられるということになるでしょう。私たちはそのような大きな日曜日、主日を、今日祝います。しかしそれは、新型コロナウイルスの感染拡大の不安と恐れの中、いつもとは違うかたちで祝われます。教会での礼拝としてではなく、個人での、また少人数での祈りというかたちで祝われるのです。私たちはこの現実を、どのように受け取ればいいのでしょうか。

復活したイエスは、触れようとするマリアに、「私に触れてはいけない」（ヨハネ 20：17。聖書協会共同訳）と言います。死んだものと思っていたイエスが生きていたという喜びに満たされ、驚き、興奮してイエスに触れようとするマリアの気持ちを想像することは難しくありません。しかしイエスは、それに水をかけるように言うのです、「触れてはいけない」と。おそらくマリアはがっかりしたことでしょう。また、もどかしく感じたはずです。死んだと思っていたイエスが生きていること、主の復活を、その姿を見て、声を聞くだけでなく、実際に触れることを通して体験し、喜び、祝いたかったのではないのでしょうか。しかしイエスはそれを遮り、彼女を弟子たちのところへと遣わしました。復活の知らせを伝える使者として、福音の宣言者として遣わしたのです。そうして教会がはじまりました。

教会は、復活のキリストのからだです。いつものように集まることのできない今年のイースター、私たちはマリアともどかしさを共有します。しかしそれは、私たちこそが、この世にあってすでにキリストのからだであるからです。私たちは自分

のからだに触れることに執着するのではなく、キリストのからだとして、与えられた隣人のよい隣人となるように遣わされています。私たちは離れていてもキリストのからだであり、イエスは私たち一人ひとりと今ここに共におられます。そしてこのイエスを通して、私たちはたとえ離れていても一つなのです。この喜びをもって、大きな日曜日を共に祝いましょう。アーメン。